

## 裏切る

茶園 梨加

最初に出席したのは第十五回研究会（二〇〇五年七月十六日）です。目取真俊「水滴」（一九九七年）を読み、参加したのを思い出します。多くの刺激を受けながらも、自分の知識の無さに失望しながら帰りました。

正直に申しますと、当初研究会に対する自分の態度は、積極的なものではありませんでした。「他人」が興味関心のあることとして、「原爆文学」を受容していただけです。しかし、参加者の「顔」がみえてくるうちに参加する回数が増えていました。研究発表だけではなく、議論が面白い。「へー」「ほー」の連続です。単に「私も原爆反対」ではなくて、テキスト（つまり「原爆」）を読みかえることの面白さが味わえるからです。当たり前だと思っていたことが実はそうではない。良い意味でたくさん裏切られてきました。ただ、他の人ではなく自分が、何かを発信できるのだろうかという疑問は未だにあります。自分自身の関心である戦後文化運動、作家名をあげるなら上野英信、石牟礼道子らが「原爆」とつながる。しかし、それを言葉にすると、ではどうやって？ と、かまえてしまったようです。このことは、この会で一度も発表をしていないことも関係しています。

つい先日、別の場所で転機が訪れました。日本文学の講義で井

伏鱒二「かきつばた」（一九五一年）を読みました。なぜ作品のなかの水死体は女性なのだろうか。疑問が浮かびます。「原爆文学研究」を改めてめぐります。研究会で話題にあがった小説、マンガ、研究書を読みあさります。「原爆」が物語化される際の典型と逸脱、その他、これも話したいあれも伝えたい、配付資料が増えていきます。多くの知識を原爆文学研究会から得ていたことを、改めて痛感しました。

肝心の私自身の話は、受講生にとつて典型から逸脱したものとなったのか。典型ともとれる感想文がならびました。ただ、その日、これまで一度も無かつた間違いが一つ。一名だけ受講科目名を間違えていました。書かれていたのは「日本史学」。彼／彼女にとつて「日本文学」の概念を逸脱するものであった、と好意的に、強引に、解釈しています。

さて、ますますきちんと向き合わないといけません。

今、石牟礼道子の文が頭をよぎります。丸木俊・丸木位里との共作『みなまた 海のこえ』（小峰書房、一九八二年）の一節です。

しゅうりりえんえん えんえん

井川の神さまが 夜なかに申される

どういうものか このごろ息がつかってきた

わたしにうつる会社の炎 毒ガスの空

去年もばくはつ ことしもばくはつ

ばくはつたんびに 会社ゆきたちが死ぬ

どのように逸脱し、裏切っているのか。小説や詩を批評する私のことばが、テキストに引き摺られてしまいそうで怖い。でも、ついてゆきたい。